

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録(速報)

- ◆日時： 平成15年7月10日(木)18:00～
- ◆場所： 高知大学人文学部 5階 第1会議室
- ◆出席委員： 上田 真弓 (近森リハビリテーション病院ソーシャルワーカー)、新宮 玲子 (特別養護老人ホームシーサイドホーム桂浜施設長)、瀬戸 節子 (家庭教育ヘルプライン24電話相談員・子育て応援団)、田中 きよむ (高知大学人文学部教授)、玉里 恵美子 (高知女子大学社会福祉学部助教授)、中平 佳宏 (宿毛市社協事務局長)、浜永 鈴美 (日高村社協主監)、平野 麻喜子 (高知県社協地域福祉課長)、堀川 俊一 (高知市健康福祉部健康福祉担当参事) 松本 光司 (特定非営利活動法人Brain副会長)、和田 善明 (土佐町保健福祉課長)、元吉 喜志男 (高知県健康福祉部保健福祉課長)
- ◆欠席委員： 板橋 靖 (共同作業所ウェーブ所長)、高橋 正子 (葉山村民生委員)、



議事内容 注:正式な議事録となった場合、発言内容が一部変更となる場合があります。

○司会(田中委員)

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会を開催させていただきます。今日の検討項目は、大きな項目の(オ)の最後のその他です。それから最初に戻りまして、(ア)高知県における地域福祉推進の必要性ということでご議論いただきまして、今日で一通り項目に沿った議論としましては最後としたいと考えております。前回は(オ)地域福祉計画策定上の技術的課題の④まで議論しました。①が地域での生活課題を明らかにする方法。②が住民参加の方法。③が保健医療等他分野との連携。④地域福祉計画の策定体制。それから、その他という所が残っております。このその他につきまして、皆さんから事前にご意見をいただきました。全体の感想としてということで福祉というのは困っている人を助けるというイメージがあるが、困っていない人にも身近に考えられる存在であってほしい。生きがいをボランティアとすぐ結びつけるのではなくて、その地域に住んでいて気持ちよく助けたいという気持ちが大切なのではないかと。定年間近の男性が何か自分の経験を地域に役立たせたいと申し出たり、高齢の方が子ども文庫を開いて読書の場を提供したり、野鳥観察やピクニックなどを行っているという例を挙げられています。高齢者にもできることがたくさんあるのではないかと。その気持ちを支える人が大事である。それから地域福祉計画ということについて、つくったら終わりめで良しとするものではないということに十分注意する必要がある。あるいは高知ということで、高齢化、過疎化、合併などの環境変化の中でも将来に向けて明るいビジョンを示すことが考えられるのではないかと。楽しく取り組むことが大切である。こういったご意見を事前にいただいております。この地域福祉計画策定上の技術的課題のその他ということで皆さんのほうで何か意見ございますでしょうか。

特にございませんか。事前にご意見をいただいた方も文章のとおりということでもよろしいでしょうか。

そうしましたら、最初に戻っていただきまして、高知県における地域福祉推進の必要性についてご議論いただきたいと思っております。ここにつきまして事前にも多数ご意見お寄せいただいております。なぜ地域福祉を推進する必要があるかという一番冒頭の部分につきまして、高知県の地域特性、世帯にかかわる特性ということ項目を挙げていただいております。あるいは県民の特性、熱しやすく冷めやすい。そういったものも挙げていただいております。それから推進していくためには「人」「場」「資金」というものが必要である。県民一人一人に「一人一役」を訴える総ボランティアということもご意見でいただいております。それから福祉教育の必要性のご意見があります。これも日ごろのご経験からでしょうか。個人としては素晴らしいパワーを持っていても集団になると消極的、あるいは無関心になる傾向を感じる。

それからこれはこれまでご議論いただいたことを思い浮かべながらですので正確ではない部分もあるかと思っておりますが、必要性ということで書かせていただいております。例えば少子高齢化の中で、人と人の触れ合いの機会が高齢者や子どもの側でそれぞれ減ってきているのではないかと。あるいはこれも以前に出ていた議論ですが、市街地での近隣意識の希薄化。中山間地の限界集落化などによる共同体的な機能の低下というようなことがあるのではないかと。地域福祉力やコーディネート機能に地域格差が存在するといったことがある。あるいは選択ということを重視した場合、その本人の意思に応じた暮らしができるような条件が必ずしも整っていないのではないかと。フォーマルなサービスの網の目から漏れている人への対応策の必要性。そういった中で生活基盤を軸とした地域活性化ということも課題としてあるのではないかと。それから今後に向けて市町村再編の中での福祉コミュニティということ、住民が真剣に考えて取り組む必要があるのではないかと。そういったことなどを挙げさせていただきます。本来(ア)から始める所を(イ)からの具体的な議論がしやすい所から、この研究会では始めてきたわけですが、それらの議論を踏まえた上で高知県において地域福祉を推進する必要性はどういった点にあるのかということにつきまして、冒頭に示しておく必要があるのではないかと。そこら辺で皆さんのほうでここに関しましてご意見をいただけたらと思います。今日お配りいただきましたこの3枚とじの最後を見ていただいたら、これまでの議論の経過の項目がすべて並んでいます。この(ア)というのは全体の中でその一番最初に当たる部分ですね。

○新宮委員

私が一番最初に書いていますから発言しますが、私はもともとが高知県(人)ではないので、県民の特性を非常に感じるのですが、県民の特性として何か行事があるとウワーツと燃えやすい。非常に団結力がいいんだけど熱し

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

やすく冷めやすいということもあるし、私が、私がというふうな感じが非常に見えるので、チームワークづくり。こういうふうな策定は息が長いですね。話し合いを今回ずっと通じるとこれには期間が何年という期間がない場合に、相当な回数とか年数をかけてこの地域福祉推進を策定していくときに、そういうふうな県民性から考えてなんとか最後までいくような仕組みづくりを考えていくことが大切ではないかと思えます。高知県における地域福祉推進の必要性はもちろん必要であるという結論の中で、息が長い作業を最後まで到達していくように、またそれが実行して、評価できるようなどころまでを書いておかないと途中でどこかで止まっていくのではないかというふうに思えます。

○司会(田中委員)

地域福祉計画をつくるだけでも場合によっては1年、2年とかかる場合もありますし、それを実行して、さらに実行した結果、評価していく。そういう長期的な取り組みを考えた場合、なかなかそういった持続的に取り組んでいけるのだろうかという、あるいはそのためにはどうすればいいのかというような問題提起的なご発言ではないかと思えますが、皆さんいかがでしょうか。例えば、社協さんですと活動計画などでこれまである程度ご経験されている部分があると思えますけれど、そういった計画を立てて実際に実行して、それを評価していくことを持続的にやっていく上で難しい面とかはございますでしょうか。あるいはこういうかたちで比較的最小ながかかわっていただけたという逆の要因なんかもあるかもしれませんが、それぞれご意見いただければ幸いです。

○中平委員

活動計画を以前にも策定したこともあります。うちのほうでも時間をかけて策定をやりました。それをやっていく中でお互いのスキルをアップしていくかと、相互に理解を深めるとかいうところで非常に効果があつたように思えます。持続性というか、その部分については時間をかけてもそれぞれ参加していく中で、気づきとか感じとか、そういうものがあつて次へ次へ発展して、参加されている人はどんどん意欲的になってくるというところが見られたと思います。問題があるとすれば、やはり(計画を)立てた後にどういうふうに評価なり、見直しなりにエネルギーを注げるかということが先程おっしゃられた、熱しやすく冷めやすいかなという部分にかかわるのではないかという感じもしています。

○司会(田中委員)

そうしますと活動計画の場合ですと、そういった計画の策定、あるいは実行回りまでは参加してもらう人が参加回数が増えるに伴ってむしろ積極的になるけれども、評価というところでトーンダウンするというのでしょうか。浜永委員、何かございませんか。例えば活動計画の経過を省みられて、参加が細っていったとか、逆に太っていったとか、どうでしょうか。あるいは皆さんの熱意とかというのはある程度持続していけますか。

○浜永委員

やはりそれは最初の段階から、住民がどれだけ主体的にその計画の策定に参加をしていたかという部分もあるんじゃないでしょうか。特に今度の地域福祉計画は、課題を出すところから始まって、計画の策定までかなり時間をかけるということですから、今までの計画とやはりそこが随分違ってくるのではないかと思います。私も計画策定をするまでは割と機運というか、盛り上がっていくのではないかと思うんですが、そこから後をどういうふうにしていくかというのは、計画ができたところまでというのは、住民だけでなく、例えば社協の職員とか行政の職員さんなどもかかわっていく中で、策定まではかなり時間をかけるということですから、その分は割と、そこまではずっと自分たちも持続ができていけると思いますが、そこから後をどういうふうにしていくかというのが考えていけないと思えます。でもそこまでしないと地域福祉推進にはつながってこないと思えます。

○司会(田中委員)

そういったときにはある程度県民性は関係しますでしょうか。

○浜永委員

県民性は新宮委員は高知県の人ではないからということと言われましたけど、県民性と言われるとちょっと私では分からない。でもやはり大きな市部と小さな町村部という所では、計画策定までも違うだろうし、それから後の部分についても住民参加の方法など、いろいろな方法が変わってくるのではないのでしょうか。

○司会(田中委員)

そうですね。やはり大きな規模の地域とそうでない所は取り組みの仕方などはおのずと変わってくるでしょうね。今の点などに関しまして何かご意見ございますでしょうか。玉里委員、何かございますか。

○玉里委員

話をちやかすわけではないんですけど、県民性でできる、できないのではなくて、確かに私も議論好きですけど具体案がないというか、高知県の県民性みたいに思うことも確かにあるんですが、それをマイナスにするのではなくて今こそその議論好きが議論できる時が来たと前向きにとらえてほしいなど(思います)。私も高知外から来ていますが、(高知は)本当によく女性も発言するし、大阪のおばさんだつてしゃべるんですけど、やはり高知の人とちょっと違って前に出てしゃべるという感じではないんですよ。道ばたでガチャガチャ、ガチャガチャしゃべるのは大阪のおばさんなん

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

だけど、公式な所でも女性が発言できるすごくいい力も持っています。確かに議論好きだけど具体性で、では行動しようかということにはちょっと欠けるとか、そういうイメージは確かに高知で私は持っています。それを議論好きというか、話し好きというか、それが今こそ生かせるときがきたというか、みんなで集まって話をして今度こそは決めていこうというそういう盛り上がりにつなげてもらったら、むしろ県民性が生かせるとか、県民性というのは何もネガティブにとらえなくていいと思いますので、そんなふうなイメージを持って今聞いていました。

○司会(田中委員)

非常に議論好きというのは、私も感じていました。いろいろな会で積極的にご発言されています。ただ前にもどなたかがおっしゃっていたように特定の人に偏る傾向も片方であるような気もしますが、今おっしゃったように、より多くの住民がまさに議論好きを生かせるような雰囲気を地域福祉計画策定との関係で。

○玉里委員

やはりやる気とか、あるいは入ってきたい人を排除しないとか、開かれた場ですね。住民のためにと先生も言われているように住民による住民のための計画ということだけど、もちろんそうなんですけど、多くの人が入ってきて、小さな意見も排除しないで盛り上げていくなかたちですね。もちろんリーダーシップも必要だけど、リーダーする人と多くのメンバーが入ってきて、小さな意見も言ってもらってそれも反映しながら、そういった盛り上がりにつながっていけばいいものになるのではないかなという方向性は必要ではないかと思います。

○上田委員

そういう意味でいうと、先日土佐町の小学校へ講演に行ったときに、後ろに保護者が来られていました。社協と学校側が一緒になった親子講演会だったと思うんですが、講演が終わって話をしていたときに、社協の方が来られて「今日のこの講演を開くにあたっては、皆さんが共同募金にどうのこうのしてこういうふうにしたものが還元されて講師を呼べて、この場が設けられているんだよ」という、住民が共同募金したお金の行方とか、そういうものがこういうふうになって役立っているんだと。そういう意味で共同募金はすごく大事なことなのだとすることをちゃんと住民に返してあげているということ。私は古切手とかプルタブとか。プルタブが車いすになるというのは結構見えてきているんであれだと思いますが、住民の方が何かを出したときにそれが形となっていくのは、こういうルートでこういうふうになって、こういうふうに役立っているんだよということをちゃんと住民に返してあげることが、では今度はこういふことはどうなんだろうといういろいろな発想を住民からも吸い上げられるかなというところで、私は今まで講演に数(多く)行った中で社協の方がそういうふうには保護者の方に言っている場面を初めて(見ました)。その設定がそうだったのかしれませんが、直接言っておられるのを聞いたときにいいなと思いました。

○司会(田中委員)

共同募金を例に挙げていただきましたけれど、やはり住民がいろいろな形で貢献したことがどのようになっているのかということ、最後住民がちゃんと認識していけるということ。それは先程の中平委員のご発言にも関係してくるような、自分たちがやって最後それがどうなっていくのかということ、自分たちがちゃんと感じ取れる、あるいは認識していくということが、さらに継続性につながっていくのかもしれないですね。

○上田委員

無駄になっていないと思ったら人助けじゃないですか。物であろうがお金であろうがなんだろうが。もう自分たちのしたものがどう使われているのか分からないということほど、何か不安で次にやろうという気にはならないと思うので大事なことだと思います。それは大事だろうと思いました。

○司会(田中委員)

募金を例に挙げていただきましたが、それは例えば人的な面での貢献でも、自分たちがボランティアなどをやったことが相手に対してどういうふうに関わられたのだろうか。あるいはそれがどういう点で良かったのか。どういふ点でまだ課題があるのかということ、自分たちが自分たちの問題としてとらえ直していくということがさらに次につながっていくのかもしれないですね。ほかにそういった地域福祉の推進ということにどのようにかかわっていくのか、あるいはそういった仕組みを考えていくのかというようなこととか、あるいはそれに先立って全体的な必要性ということで、何かご意見ございますでしょうか。(イ)地域福祉推進上の課題と対応上の視点ということでもある程度ご議論をいただいていることなんですけれども、高知において推進の必要性ということにかかわって、ほかにご意見ございますでしょうか。もちろん、今何人かにご発言いただいたことに引きつけてなおご意見をいただいてもかまいません。

行政は行政で責務ということでやられているわけなんですけれども、行政のお立場から高知の状況をご覧になって、こういう点でやはり地域福祉はどうしても必要だと思われる点はございますでしょうか。

○堀川委員

私はどちらかという高齢者のほうを主にやってきたことがあるのですが、介護保険が始まる(平成)12年のときに、そういういわゆる寝たきりの人に対するサービスは量的に増えてくるけれども、やはり痴呆の人にマッチしたサービス、在宅で支えることがなかなかないんです。最近ではやはり痴呆の老夫婦の方とか、老夫婦でどちらかも痴呆

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

の方なんかの場合は市内でもどんどん出てきていまして、やはりそういう人たちがある程度まで進行すれば施設ということに当然仕方がないのですけれども、最初に地域から、地域でもよくしてくれる場合と地域から排除されていく場合の両方あるわけですので、そういう方がやはり少しでも。この方たちの場合は大抵の場合は施設で過ごされるよりも住み慣れた所でされます。もう少しやはり長く地域に住んでいただくために、やはり地域の中でもそれを少し支えるほうにいかないと難しいということはこの2、3年そういう思いがどんどん強くなってきました。

それともう一つ、いわゆる虚弱の方などの場合に緊急通報装置というシステムがあります。今の制度というのは緊急通報装置なんですけれども、不安に答えるものというニーズがもう一方であるんですね。そうすると制度と、緊急通報が必要な部分もちろんあるんですけども、そうでない、不安に答える、寂しいとか、そういうようなもので押してしまう。だけど「何が起こったの?」と言ったら何も起こっていないみたいな、そういうこともないと制度とニーズのミスマッチが起こってくるのではないかなと思うんです。どんどんつけたらいいじゃないかと言われるんですけど緊急としての必要がない所につけていくと、それに答えきれなくなるんですね。それなんかも要介護前の虚弱から要介護になりかけぐらいの辺りで大きなことというのはあると思います。

○司会(田中委員)

今、2点にわたってご意見をいただきましたが、今、高齢者世帯などが増えているということがございます。そういうことは玉里委員がよくご専門にご研究されていることですが、そういう中でも特に痴呆性高齢者の方が在宅、地域で少しでも長く地域で暮らしていけるような方法といった場合、まだそこら辺が弱いのではないかな。それからそういった不安とかに答えるというニーズですね。それは緊急通報装置とかで対応しない、何か地域で寂しいという問題、例えば話し相手とか、そういう意味での対応が必要ということでしょうか。

○堀川委員

実際は分かりませんが何か人が自分とかかわりを持ってきているという感じがよりあれば、そういうことはなくなっていくのかなというふうに思うんです。

○司会(田中委員)

それは結構あるんじゃないでしょうかね。やはりいろいろなかたちでのコミュニケーションを求められているという部分はかなりあるような気がしますけどね。

○元吉委員

ここ数年、行政の中でも地域支え合いの重要性をことさら言うことが増えてきたのではないかな。増えてきた背景を考えると、やはり以前はそういうことはあまり特化して考えなくても良かったことが薄れてきたので、あえて意識をしなければならぬような環境が感じられ始めたのではないかなという感じがします。僕らも団塊の世代ですが、小さいころのことを考えますと、田舎で祭りがあったりとか、いろいろな行事があったら地域の青年団活動等もありますし、いろいろな格好で子どもが大人に接触する機会もあれば、老人に接触する機会もあったように思います。それは意識はしてないけれども、いろんな局面を見てきたし家庭の中でもそういうことに肌で触れながら育ってきたのではないかな。ただ、このところへ来て、世の中が忙しくなってきたこともあるんですけども、随分少なくなってきて、それをことさら言わないといけなくなってきた背景があるのかなという感じがちよつとします。

特に高知ということで考えていきますと高知市一極集中ですので、ちょっと振り返ってみますと、日本全体が昭和35年ぐらいから40年、これが一挙にドドッと都市へ出ていったところですね。このとき(高度経済成長期)に44都道府県の中で25県というのは人口が地域において減りました。当時、76%ぐらいに当たる、市町村レベルで見ると2,574という町村が減少しました。その辺りから日本の構図のバランスが崩れてきたようです。それから高知県の中でも中山間がどんどん減って、例えばうちの中でも一挙にその5年間で20%を超えて人口が減った所がありました。それが今、随分底をついてきたのではないかな。これから行政がやるにしても非常に限界があるし、それから町村合併もそういう背景と無関係ではない。そうすると公的な部分、社協も含めてやれる部分というのは随分高知の中で少なくなったということが1つあります。

前も言ったかもしれませんがそれから人口規模でいきますと、だいたい標準団体の町村というのは、8,000人が国が想定している団体の規模で、その中でいろいろなことを考えるのですが、高知の場合はほとんどが5,000人未満ですし、その中で3,000人未満というのが圧倒的に多くて、それから高齢化そのものも30は当たり前の世界に入ってきています。そうするとかなり意識したところでやっていかなければならないような状況になっています。それから逆に例えば高知市のような都市部も田舎は孤独があるけど都市はないかといったら、考え方によれば都市は都市のまた孤独はあるよう気がします。

それから今指標で見ていくと30年くらい、戦後、ちょっと高度成長入る前くらいのときに、国民の医療費を100とし所得を100とした。ある段階までは所得がずっと増えていましたから経済でカバーできた。ところが平成11年ぐらいの数値でいくとだいたい所得は55倍くらい、ところが医療費は130倍くらい。この差が今やはりいろいろな制度が変わり始めてきたところなんです。そうするとこれから支えていく部分と人口構成もあって、高知のそういう特性もあって、それから生活の中の環境の変化があって、あえて福祉の話というのが、以前は生活の中にことさら言わなくてもあったものを意識しなければならぬような環境になってきているのかな。そこで1回ちょっと立ち止まって見て、このことをもう1回検証していく必要があるのかなという感じがします。

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

○司会(田中委員)

かなり人と人のつながりがかなり薄くなってきているということも1つには。

○元吉委員

あるでしょうね。これは高知、ここだけはないんでしょうけどね。

○司会(田中委員)

小規模な人口の中で生活を作らなければいけないですね。それから医療費の問題なんかもそれを負担していく問題もありますし、それを予防とか健康づくりとか、そういったことにもつながっていきますね。

○元吉委員

もう大きな波がその施設にいることから地域へとか押し出されてくるような動きが出てきた。そのときに受けていく地域というのはどういう気持ちでその人たちをこうするのか。これは新宮委員の福祉の施設なんかもそうでしょうし、それからここにもハード、公民館、社協、施設と書いて、場ということを書いておられますが、このことの視点というのはすごく大事ですけれども、潜在力をもっと使うと遊休のものが随分あるのではないかとことをかなり感じています。公民館なんかもありある。あるいは学校の廃校等も含めた公共施設等も含め空き家も含め、だからそういう場が本当にそういう目でもう1回見直した格好の中で、ソフトも入れて使っているようになっているのか。そこを意図すると結構潜在的にはまだまだ使える部分があるような気がします。

○司会(田中委員)

やはり病院などから地域に戻っていく場合の場を十分見直されていない面があるということでしょうか。それがまたそういうことを見直しながら地域福祉を推進していく必要性ということにもつながっていくということになりましょうか。重要なお意見をありがとうございました。

○和田委員

ひと月ぐらいの間ずっと行政懇談会ということで町内の9会場を回ったのですが、そのときに、それは町村合併の問題が主でそういう話でずっと回りました。そのときに感じたのは、例えば土佐町なんかが高齢化率を見ても毎年1%くらいずつ上がっている。確か3年前が約32.8%ですか。それが1ポイントずつくらい上がってきておる。平均するとだいたい1年で50人くらい65歳以上が増えてきているような状況。反面、子どもについては(1年で)25、26人くらいしか生まれていないという状況もあるわけです。7月1日の土佐町の住基(住民基本台帳)の上での人口が4,999ということで5,000人を切ったと。これについても順番に減っていくであろうというふうな推計も出ておるわけです。そうしたときに土佐町の場合、211平方キロですか、面積が広い。

集落によっては全員65歳以上という集落もあるわけです。そういった中で集落での全員がやるような仕事についてもなかなかできないような状況にもなっているわけです。例えば町道の草刈りであったり、それから林道の整備であったりということもできないということで、行政に対していろいろな要望も毎年出てきているような状況にあるわけです。例えば70歳になっても、80歳になっても若い人がいないということで、現役で仕事をしないといけないという人もかなりいるわけです。それをしないと田んぼや畑、山林が荒れるというような話もよく聞くわけです。

それと何年か前に3階建ての1階部分に高齢者用向けの町営住宅をつくったのですが、その住宅へ来て生活をしてもらうことが、その人のためにはより健康的でいいのではないかとということで話をしても、生まれて育った住みなれた所から離れて別の所で生活をするということはなかなかよいしない。例えば町外、市内、県外に子どもがいるということで、例えばそこへというふうなことでどうしてもそこで生活できなくなって出ていっても環境になじめないということで帰ってくる。どうしてもまたそこで生活できなくなって施設に入るというようなケースも今までに私も何人か対応してきた経験もあります。今の時期に地域福祉、その地域をどうしていくか。Aさん、Bさんの生活をということを地域ぐるみで真剣に考えないと過疎が進む、若い者が減ってくるということで今が一番大事な(時期だと思えます)。さっきも言いましたように地域で、集落でみんなでお互いに支えあって……。失礼かもしれませんが、比較的田舎の場合は都市部と比べるとやはりそういう隣近所の助け合いはまだ残っている部分がありますので、再度、今そういう部分をお互いに目を向けて考えていかないとこれからやはり何年かしたらそういう、本当に集落が崩壊するようなことになってくるのではないかとというふうな地域も中山間の中では土佐町に限らずいろいろな町村であるのではないかとことを最近つくづく思うわけです。ですからこの計画を地域で時間をかけてそういうことを言って目標に話し合うことだけでも、やはり地域がこれから活性化していく上では非常に大事なことでないかというふうに、特に最近そういう思いがしております。

○司会(田中委員)

非常に中山間の実態を見据えた非常に必要性ということから重要なお意見をいただきました。集落で言えば高齢化率100%のような集落というのももう出てきているということですね。

○和田委員

それと集落の中には高齢者もおりますし、当然障害者もいるし、いろいろな方がおいでになるわけですので、高齢者に限らず障害者も含めて。

○司会(田中委員)

なるほど、かなり共同で行う作業も難しい面がありながらもそれをやらざるを得ないかたちで70代、80代の方でもやっている。あるいは同じ町内でも住宅ということをつくった場合でも、自分の生まれ育った集落でも別の所だと同じ町内でもちょっと動くことへのためらいがある場合があるということですね。

○和田委員

例えばAという集落から町営住宅へ。高齢者世帯の一人暮らしということで、昼間はその生まれ育ったといいますが、田、畑のある所へ送って行って帰りにまた迎えに言って、夜はその住宅でということもできたらというふうなことも一時考えたこともあるんですが、実際、実現はできなかったです。やはり離れたがらない高齢者の方はおります。

○司会(田中委員)

地域に対する愛着が深いということですね。子どもさんの場合でもちょっと離れていたらそちらのほうにも……。

○和田委員

これはある例なんですけど、もうこれはかなり前になるんですけど、一人暮らしの方でなかなか身の回りのことができないということで民生委員から話がありました。いろいろ相談をして私も話しにいったんですけど、「県外に息子がいる。その息子が私のために一戸建てを建てて、私の部屋もつくっていつでも来たらと待っている。役場の職員さんのお世話にならん」というような、そこまではっきりは言わんですがそういう言い方をされて話も進まなかったんですけど、その方が何日か後に息子の所へ行って、半年まではいなかったと思うんですがまた帰ってきた。そうしたら痴呆も進んで、最終的にはその方は施設へ入所されたんですけど、結局、向こうへ行っても息子は仕事に行くし、(息子の)奥さんはパートに行く。子どもは学校に行く。そうしたらこちらから行った男性が1人で(昼間は)生活をしないではいけない。そうしたら出て行っても知った人はいない。家に来る人もいない。話をする人もいない。行くといったら例えばスーパーへ行っただけウロウロして帰ってきて、また家でずっとテレビを見ているというような生活を何カ月かして、それに耐えられなくなったということで帰ってきた。そういうことで、最終的には特養に入所されたんですけど、その介護保健が始まる前でしたので、やはりそういうのが環境の変化で痴呆にしても進んだという面もあってまして、非常にこう……。

○司会(田中委員)

それは一般的に考えても重要なご意見ではないかと思えます。やはり住み慣れた地域から離れると(高齢者は)若い人のように友達をつくりにくいですし、そういう環境の変化が痴呆を進めることにもなるということで、先程の元吉委員のお話のやはり地域の中で住み続けられる環境をどういうふうにつくっていくのかということは大きな課題でしょうか。

○元吉委員

今のお話に関連しますと郡部から高知市へ来た。今と同じ思いをされている老人がいました。ただその地区は、たまたま老人クラブ活動とかいろいろやっていたんですね。だから花見のときに「今度来たおばあちゃん一緒に入らん？」と何度か声をかけてくれて、その会合に入った。そうすると一人一人知り合いがその地区ででき始めて、そうするとクラブで旅行に行ったりするうちに、転校生が友達をつくってきたみたいな格好になるわけです。だからそういうふうなものが例えば都市の中でも意識的にあったりとか、地区の町内会なりがもしそういうようなことの意識があるとする、今のようなケースのうちの何ケースかというのはフォローできるのかもしれないですね。今おっしゃられたようなことは、非常にもう一般的な例でそういう思いをされている話は随分私なども聞きます。だからそういう意味からも地域福祉計画の中のそういう人たちがどういう気持ちを豊かにしていくような仕組みをその地区で工夫ができるのか。だから1人で抱えるのはなかなか大変ですが、一人一人がこれぐらいのことをすることによって、全体が支えていけるような環境をもしつくれるとしたならば、それがまさにこういうことを考えていく背景になることかなと思います。

○司会(田中委員)

必ずしもいきなり介護とかそういうことでなくても、先程元吉委員を含めて何人かの方がおっしゃっているように、地域の中でいろいろな人とのつながり、あるいは友達ができるような関係をつくっていく。あるいはそういったものができるような雰囲気が地域の中にあるということが先程の寂しい思いをするということをなくすということも地域福祉の中ですべていきなりサービスということでもなく、そういったものがあるということが、やはりそこに住んでいて良かったと思えることにつながるということでしょうかね。

○和田委員

普段に日々の生活の中で、例えば確かにうちなんかの場合は広いので足の確保の問題もあるのですが、ここにも出ていますが、例えば公民館とか社協の施設の活動の拠点の場、地元の集会所なりどこかへ行ったら誰かが何人か集まっていつもいる。そこへ不定期に行ってもそういう話ができたり、いろいろなそういう人との触れ合いができるような場があればかなり違ってくるのではないかなと思いますね。土佐町では宅老所といいますが、誰でも宅老所の機能やそういうのがあったら誰でもそこで半日でも1時間でも会話ができると人の触れ合いができてというふうなもの

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

があったらというふうなことをいろいろ研究はしています。やはりそういう人と触れ合うことが一番の解消というか、解決というか、そういうことが必要ではないかと思えますけれども。

○司会(田中委員)

いろいろな人が集まって交流できるいわば多機能型の宅老所的なもの、そういったものが生かされれば、そこが1つの拠点になってみんながいろいろと活気づいてくるのではないかということですね。今お三方の委員からご意見をいただきましたけれども、とても行政サイドにいらっしゃるとは思えないような、地域のほうに回ってきてほしいようなご意見でした。それぞれ自由活発にご意見いただきたいと思えます。

○瀬戸委員

全く反対のことを考えてしまったんですが。人が生というものは、人は生まれたときは喜んで迎えてもらえますけれども、老いて死を迎えるときにはたくさんの人の手を煩わせてこの世とお別れしなくてははいけないのです。その死の迎え方ということもある程度の年になったらお年寄りの方も自覚をしたり、何でもすべて行政に任せるのではなくて、そして自分の希望がどこまで充足されれば良しとするかというところを自分で気持ちの中に持っておけばいいのではないかなと思うんです。量的なものでさっき言われたように緊急連絡のそれ(装置)をみんなに渡らせるようにするのが問題解決ではなくて、やはり心の叫び、心の寂しさというものは、そういう物を取り付けたから消える、緊急事態だからというので人が来てそれを助けるというのではなくて、心の持ち方、なんと言ったらいいんでしょうか。これが足りないからこうしたらいいんじゃないかというふうに与えられるばかりのものではなくても、死に対する自覚、老人になったらこうなるのだという自覚も、それは痴呆になったら仕方なくて人のお世話にならないといけません、ある程度になりましたら自分の死にざまというものを考えられておいたほうがいいのではないかと思えます。それは全然福祉と関係なくて、また意見としておかしいのですけど。

○上田委員

おかしくはないと思えます。やはりうちの患者さんとかでもやってもらって当然という、家族が犠牲になってくれても「わがおやじのことやきやれ」ぐらいに、やはりその出方ですよ。やはり元気なときに子どもたちにも迷惑をかけないように年を取っていくという気持ち、自分の健康に気をつけるという気持ちの持ち方というのがすごく大事なところで、行政に頼っても限界がある、人に頼っても限界があるというのは確かなところなので、やはりみんないい死に方をしたいと思っているんですけど、その辺りではやってもらって当然という意識が強いとどうしても、すべてを変えていかなければいけない。変わらなかつたら世の中が悪いというふうに、あるいは何かが悪いというふうになっていきます。その辺が新宮委員ではないですが、折り合いというものをどこでどうつけていくかという部分で、なかなかそれは難しい部分で、それは全然関係ないことでもない私は思います。

○新宮委員

この地域福祉を考えると、満足といったらもうみんな満足が違う果てがないけど、だから住みやすいとか、そういうふうな言葉で考えていく。その住みやすさはみんな一人一人によってまた違うわけです。だから要するにどこで自分が折り合って生きていくかということを考えたときには……。

○司会(田中委員)

突き詰めると、要するにどうする、されるというよりも、一人一人がその地域でどう暮らして生きていく、あるいは死を迎えるのかということでしょうか。

○上田委員

まだ老人になっていないので老人の気持ちは分からないじゃないですか、でも子どものときにみんなで連れ合っってバレーボールをしようとか、何とかしよう遊ぶグループがあるでしょう。そういうのはやはり青年になっても、中年になっても、老人になってもそういうのがあれば、老人で集いたい人は集いたいのかなど。本当にお年寄りは何をしたいのか。何をしたら毎日が楽しいのかというのは想像でしかそれが分からないけれど、「自分たちがこういうふうにしたいんだけどこういう場がないもんだろうか」と若者に相談したら、その若者がその場を提供することを一緒に考えられるというかたちでないと、本当にニーズとして挙がっているものは何かというのが正しくつかめないと分からないですね。

○元吉委員

今、たまたまさっきの流れの中で過疎の話と高齢の話が前に出てきましたが、要は福祉といったらゼンタイを広げているものですね。ですから、逆のバージョンもあるんですね。例えばずっと東京暮らしをしていて、いろいろな文化のこととかエキサイティングなことに触れていた人が、フツと高知に来たときにすごく孤独になってしまうし、自分の行き場がどこだろう。例えば、嫁いで高知に来た人が男性が高知なのでそれだけに頼って来た。ところが自分が育ったカルチャーと全く違うし、どこに何があるかも分からない子どもが生まれても、子どもの遊び場がどこにあって、どこにどういうものがあるか分からない。そういうときに、これは行政の押しつけではなくて、その若いお母さん方が集まって、その知恵から出てきたような情報誌をつくと、結構、こんなものがあるんだと、そこで初めて気づいてサークルへ行ったりす

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

る。障害を持っている方もそうだと思います。障害を持っている方に何かしてあげるとなるとおかしくなると、もっとさっきおっしゃられたような人間と人間のところでどうするか。これは難しいんですけど、そのときに、最近ピア・カウンセリングの話が出てきて、それがやはり心を開いて、開いてダーツと流し出すことによって、自分の重さが少しでも軽くなれるんだったら、それはその人にとってすごく幸せなことでしょうね。

そうするとそういう選択肢みたいなものをあまり無理のないところで、いろいろな格好でつくって意識しながらやっていて、自分に合ったところにより近いところに行けるようにしてあげることというのがすごく大事なのかかもしれないと思うんです。それからご老人のことで言いますと、私の知り合いでチャレンという職業の方がおります。これはまだ日本の中で非常に少ないと思うんですが、あの人と話すとき自分が死ぬときにもしそばにそういう人がいて、話を聞いてくれてドーツとはき出せば随分いい死に方ができるんだなと思うぐらい、ぐっと入ってきてくれて。やっぱりどんなに経済的に地位があつてとか言っても、でもやはり死ぬ直前というのはいろいろなもんものことがドツと出てくるのでそれを全部はき出して、スーッとした表情になれたらすごく幸せだろうな。それはプロの世界ですけどね。やはりそんなことを考えると、やはり選択肢といいますか、これはどこまでできるか分かりません。それから行政が考えて型にはめてしまうとそれこそ合う人には合うんですけど、合わない人はいっぱいあるかもしれない。そこがピア(カウンセリング)の発想ではないですがいろいろな思いをしてきた人たちが、自分もこんなことでこんな思いをしたから、これくらいのことを地域の中でやっていったらきつと反応してくれる人があるかもしれないみたいな話でポツポツ、ポツポツ、そういうことができて、その環境をサポートできるようなことができるのもっといろんな方がいろんな格好で今よりもスツと心が温かくなったりできる環境ができていくんじゃないかと思います。

○司会(田中委員)

同じ目線でお互いに励ましあったり元気づけあったりしながら、その人自身も前向きな気持ちでできればいろんな人に迷惑をかけずに済むように、自分の行く末ということをしっかり見定めながらも、周りにはそういったことでお互い対等な立場で励ましあったり、相談しあったり、あるいは当事者の立場でそういう関係、いろいろな次元で地域の中にそういった環境をつくり出していくということになりましょうか。そういったものがあるという。すべて上から何かされる、してもらおうというのではなくて、自分がやはりどう生きるか、あるいは死んでいくかということを考えながらもお互い対等な立場で励まし合ったり、相談し合ったり一緒にいろいろなことをやっていけるような、そういういろんな人と人との関係を地域の中につくっていくということになるのでしょうか。松本委員どうでしょうか。

○松本委員

もともと私は福祉という分野のことにはあまりあれなんで必要性があるのかと問われるとどっちだと答えられないものでずっと黙っていたんですけど、地域福祉という言葉は2つの熟語ですよ。「地域」というのと「福祉」という2つの言葉で、どっちを取るかなって。福祉を地域でやってくださいというものをつくろうとしていくのか、地域が元気になっていくために福祉は1つの手段なんだよみたいな取り方をするのかによって言葉としては変わってくると思うんです。県単位、市単位というような大きな所で福祉をやってきて、「ちょっとそれはしんどいき、もうちょっと小さい枠に落としや」みたいな感じの福祉を地域にやってくださいみたいなことやったらはっきり言ってやらないほうがいいのかなというふうに思うんですよ。結局、それって何か枠にはめてというか、こういうふうにしてやっていったら福祉がきちっと流れるかみたいなシステム化するだけのことであって、何の意味もないような気がするんです。せっかく国が「こういうものをつくりなさい」と言ってきてくれたんだしたら、逆に利用しちゃってもいいのかなという気がするんです。地域を元気にするための1つのかたちとして利用させてもらって、福祉だけにとどまらずというか、福祉というのは結局はすべてをカバーすると思うんです。さっき言われた子どもの問題もそうですし、地域に外国人が住んでいたなら外国人とのかかわり、国際交流というものも絶対これから先は出てくるでしょうし、文化のこととか、企業の問題とかということも全部地域に絡んでくることだと思うんです。産廃業者がどうのということになってきても、これも福祉にかかわってくることだと思うので、結局地域が元気になるためのものをつくろうと。「福祉計画をつくるために集まってください」とやると、多分高知の県民性のことですから、「できた、終わった。じゃあね」というふうになるでしょうから、やはり頭から「地域を元気にしようよ」ということで集まった中で、何かやりゆううちに計画とかあったほうがいいんじゃないというような自然発生みたいなかたちで何か進めていくんだったらものすごく必要ではあるのではないかなと思います。

やはりいろいろな意味で地域の力が落ちているというのは誰もが否定できないところだと思うので、地域の力を上げていくことが今回これで一番やらなくてはいけないこと。小さな技術的なことがいっぱいあると思うんです。老人には老人のやり方があるだろうし、障害者の福祉に関しては障害者の福祉のこともあるだろうけども、大前提としてやはり地域の力を上げるということが今回課せられている使命なのかなというふうに(思います)。不幸なことに子どもが人を殺すということがあって、もうすでに遅いような気もするんですけど、ああいう事件なんかやはり地域の力があれば未然に防げたことですから、やはり政策が悪いとか、学校が悪いとか、PTAがどうかという前に、家族はどうなんだ、地域はどうなんだということをまず問わないかんのではないかという気がします。やはり地域力を上げていくことを前文で書かなくてはいけないのかなという気がします。

○司会(田中委員)

非常に力強いご発言ありがとうございました。やはり地域を元気にしていく必要、あるいは力を上げていくということでおっしゃいました。それは松本委員からご覧になった場合、主観的でも結構ですが何か元気がない、力が弱いというのは先程の事件がらみの例もあるでしょうが、それ以外に何か元気でないというのは、例えば若い人なんかにとって

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

少し活気がないというようなことなんでしょうか。それとも高齢者、障害者ということで福祉ということがよく言われますが、必ずしもそれだけではなくて、もう少し広い意味で、全体。

○松本委員

そうですね。もっと広い意味でということですよ。

○司会(田中委員)

そうなるると何か若い人ということなんかも十分視野に入れていく必要が出ていくと思いますが。

○松本委員

そうですね。福祉という言葉でくれるのかどうかは分からないのですが、例えば先程元吉委員が言われたお祭りなんかもそうだと思います。力のある所は若い人も昔からやってきたことを伝えるご老人や中年の方もいて、それを支える裏方の奥さんやおばちゃんがいる所のお祭りはまだしっかりやれているじゃないですか。でもそういう人がいない、若者がいない場合もそうですし、逆に都市部になったらもうおじいちゃんとか、おばあちゃんが多いということに口出さないということになって、知っていますか潮江天満宮のおみこしはトラックに乗って回るんですよ。僕はそれを見たときに、おいしいものではなくて寂しさを感じるくらいだったんです。おみこしは担ぐからおみこしはずなのにトラックに乗って回っているのを見たら、あまりそれはありがたくもなんともないなと思ったんです。やはり祭りを見ても全然元気さというのか、やっていくことじゃないですか。何か自然の流れの中で毎年これをやろうやということやできてきたことができなくなっているというのは、やはり元気がない証拠なのかなというふうに思うんです。

○上田委員

すごく単純な疑問ですけど、「福祉って何？」というところは、福祉はみんなを幸せということでしょう。私は、でも世の中の福祉という言葉のとらえ方は違うと思うんですよ。この間もある学校で、「福祉ってどういうことだと思う？ 誰のもの？」と聞いたときに「高齢者、障害者のもの」と言ったんですよ。「うそー」と私はわざとそういうリアクションをしました。でもほとんどの人がそう思っているのかなと。だから福祉という言葉に寄りたがらない。私もあまりそういうふうに思われる福祉は嫌いですけど、その福祉はもともと弱者のためのものではないという意識を持たない限りは、地域は絶対に元気にならないという。今松本委員が言っていた言葉そのものだと私は聞いていたんですが、福祉というものは誰のものか、そこの原点が違っていたら、例えばこの地域福祉に福祉という言葉が付いていたら人が寄らないんですよ。絶対に寄ってくる人はみんな同じ。どこへ行っても同じ顔ですもん。

○松本委員

ボランティアも一緒です。

○上田委員

ねっ、ボランティアもそう。みんなの幸せって、私が福祉を習ったときには、福祉というのはみんなの幸せ。この言葉の意味からいったらターゲットはみんなの幸せ。

○松本委員

このまま新聞発表したら多分今言われたようなかたちになると思います。「地域福祉計画をつくります」みたいなと新聞発表されると、もう90%以上の人は多分、「ああ、福祉か」という。

○上田委員

私には関係ないとかね。

○松本委員

そういうイメージが。

○上田委員

そういう人のほうが多いと思います。

○松本委員

関係ある人が関係あるとしか思わないでしょうし。

○上田委員

見えています。それだったらみんなが地域を元気にさせていこうって。実は地域が元気になることはみんな一人一人が健康にいいことになって、要望もちゃんとできるしそういう活力だつてつながるし、魅力ある地域づくりがあって、最後までみんな元気に住める方法をみんなが考えるじゃないですか。福祉をみんなのものだとみんなが思ったら、地域もおのずと活性化すると思います。なんで福祉がそういうふうにとらえられるようになったのか知らないですけど。

○松本委員

もっと極論みたいな話をすると、やはり福祉というのは自分がないものを削ってまではできないじゃないですか。社会的に今こういう状況で余分に余ってくるお金がない、福祉に使うお金がないときだったら、我慢しなきゃというのも1つの地域の中のかたちでもあるべきだと思うんですよ。何でもかんでも必要だから、福祉はこれだけ必要だからというのではなくて、やはり社会の流れに合わせて、ないときには我慢しなきゃ。あるときにはしていこうみたいなかたちというのは、みんなが思わないと「私たち高齢者になったんだからしてもらって当然だろう」と言ったって、でも今余っているのは現実ないんだから、そういうところがバランスとして取れていないじゃないですか、社会の中で。だからそういう意味で福祉ってということのみんなを幸せにするということは、ではおじいちゃん、おばあちゃんのために福祉のお金をどんどん払って、自分たちは飲まず食わずの生活をしたらそれが本当の福祉なのかといったらそうじゃないですよ。今現在できることをみんなが均等に行っていくことがやっぱり幸せになっていく。現段階での幸せと考えたら福祉ってそうじゃないといけないのかなと僕も思うので。

○上田委員

みんながフェアじゃないといけないですね。

○松本委員

ええ、誰かだけが何か優遇されているのは福祉ではないと僕は思うので。

○上田委員

ない、そこが間違っています。だからある意味やってもらって当然やき、妙にそれを言うし、「行政はやれや、あれやれや」。それは陳情で今まで勝ち取ってきたそういう権利運動とかそういうものは分かるんやけど、そうじゃない。もう明らかにそうじゃないと言っているんだから、本当にみんながその意識を持たないと変わらない。

○司会(田中委員)

うん、なるほどね。

○瀬戸委員

今まで福祉は関係ないと思って過ごしてきたのが、私を含めて大多数の方々じゃないだろうかと思うんですよ。福祉の意味をよく分かっているという人も少ないと思います。だから私も「福祉って困っている人に対して」というふうなことを書いてしまったのですが、自分の中にはそういうことしか考えられていない。だから同じように税金を払っても、私たち健康な者には返りは少なくて困っている人たちのほうに行ってしまうんだらうなということで、あまり関係ないというふうに、自然とそういうふうに関心が薄れていくんですね。

○松本委員

正直言うと僕だって苦しいんですよ。仕事もないときもあるしって考えたら、そんな中でこんなことやりによっていいんやろうかと思うときもあるじゃないですか。でも僕らは何かやろうと思ったらやっつけていけるだけのものをいただいているし、なんとか体を動かしたり、考えたりすることに関しては不自由はないじゃないですか。だから少しでもそういうところに不自由があったりとか、都合の悪い人がいるのだったら自分が余っている時間を使おうとか、お金が余っているんだしたらお金を使おうとかいうのが福祉ではないかなと僕は思うので、無理に何か「この枠でやらなくてはいけないからこうしてください」というようなものはちょっと違うような気がします。だからさっきから僕は何か地域を元気にしようというのは、結局みんなで考えないとできないじゃないですか。例えば1つの町内会があったとして、そこにすごく元気があってお金も持っていて企業の社長でという人が、「おい、福祉やるぞ」と言ったらお金も出せると思うんですよ。時間も余っているでしょうし。ゴルフに行く時間を福祉に変えればいいことですから、できるかと思うんですけど、それは本当の福祉じゃないですよ。みんな考えてみんなに都合のいいようなものを考えていくのが地域を元気にしていくことだと思うので、「地域を元気にしよう」というのがキーワードかなと思います。端から見て福祉っぽく見えることは、誰かが1人でやろうと思ったりとか、一定の施策を与えればできるんですけど、元気にするということは多分みんなで作らないとできないような気がするんです。

○司会(田中委員)

いろいろとありがとうございました。お二人がおっしゃっていることは非常によく分かりました。後ろの2人の学生は分かっていると思いますが、いつも授業の最初に「どういふものか」と聞くんですね。ちょっとワンパターン化してきているのですが、やはり答えは上田委員がおっしゃった、「高齢者の介護のことですか」「障害のある人の問題」「生活保護」、やはりそういう答えが返ってくるわけですね。必ず普遍的なものというよりは特定の人に対するなんらかの施策。そういう限定をしたイメージでとらえている人が(多くて)、いつでもそういう答えばかりですね。

そういう意味では確かに、本来の全ての人の幸せという一番基本的な意味合いということが、特定の人のことになっている側面はかなりありますよね。そういう意味では非常に重要な定義をしていただいたのではないかと(思います)。英語でもこれもよく言うのですが、ウエル・フェアということで、先程なんとか食べて暮らしていけることという意味の福

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

社の英語訳もあるわけなんです。足りなくて困っている人に対する対応という、こういう意味合いもあるのですが、もう1つはウェル・ビーイング、こういう意味での福祉の訳もあるわけですし、それはもっと広くよき存在とか、よき人生。だからすべての人が、自分の能力とか興味とか関心を発揮してその人らしい生き方ができること、自己実現です。これは特定の人に限らない。すべての人にとってその人らしい生き方をしていく。あるいは自分はこういう人間でありたい。こういう人間になりたいということを達成していく。そういうことを可能とするような基礎的な条件を整えていくといえますかね。これはすべての人に共通していくような、まさに広い意味での福祉、幸せという言葉に通じるのではないかと思います。

○上田委員

田中委員に質問があります。その福祉をそういうふうに関連してとらえられないようにするにはどうしたらいいのですか。

○司会(田中委員)

そうですね。そこがまさにこの地域福祉計画がそれを打開する1つの手だてで、それを投げかけるということが、。松本市方式ですけれども、まずワークショップで集まるときは「福祉とは何ですか」から始めてみんながガッツと言いつけようわけです。要するにゼロから出発するわけです。そうしたら今みたいな意見が出てくると思います。かなり限定した意味で言う人もいれば、そうじゃないのという人も出てくると思います。それをやはり地域ごとに、最初からまさに松本委員がおっしゃったようにこうあるべきだとか、こういう定義ということを決めずに、「福祉とは一体なんだろう？」から始めてみるのが面白いかなと思いますけどね。ちょっと逃げましたかね。

○玉里委員

その辺が難しく、それと田中委員の資料で勉強して分かりましたけど、前回と前々回、私も地域福祉計画と地域福祉活動計画をちょっと混乱していました。私も「みんなで作る、みんなで考える、みんなのまちづくり」だというふうに思うけれども、やはり計画が必要なんです。行政も計画が必要だし、その中に先程から話が出ている中に、宅老所どうするのか、子育てネットワークどうするのかと、そういうのを入れようと思うと、ただ単に「みんなの」と言ってもおさまらないというか、では具体的にどういうパーツを行政が組み込んでいくのですかというのがすごく大切で、その辺が非常に難しく私も混乱していたところです。

それともう1つの事例として、今大豊町が地域づくりをまだ始まったところですが、私も一住民として寄り合いに行ってお話を聞いたりしているんですけど、例えばその見守りのネットワークとか、今まで社協が進めてきたような福祉的な地域活動についてはやはり住民はイメージしないんですね、まちづくり、地域づくりというとき。やはり地域活性化のまちづくりをまずはイメージされるのだなということがひしひしと分かるんです。役場は安心安全とか、健康づくりとかそういったアイデアを地域で考えてほしいという投げかけはしていますけれども、まだそれは役場のほうでもおそらくこういうイメージだってというのがまだないから住民にもつながらないと思いますが、少しいろいろな地域で社協なんかも取り組んできたこととか、参考になるのかなと思いつついろいろお話を聞かせてもらいますが、住民にポンと落とされたときには、やはりまちづくりとか、地域づくりというときのイメージというのは福祉的というよりは、地域活性化というか、そういうところから入られるのかなという。本当に地域に。とにかく地域の課題からまた話し合おうというふうなことになっているのですが、福祉的なイメージとしてのまちづくりの意味がやはりポンと投げただけでは分からなくて、先程、松本市ではそこから始まったとお聞きして非常に参考になって多分コーディネーターみたいな人が道筋はつけつつ、みんなで作るとか、そういうものが必要なのかなというふうに思いました。

それともう1つ、やはりみんなの地域づくりだけど、私はやはりもう一回社協に戻りたいんですけど、今回の地域福祉推進では社協の役割というか、今まで、いろいろなまちづくり、取り組んできたと思いますけど、やはり福祉的な、ちょっとまた話を戻してしまいますけど、「福祉的なまちづくりは何なの？」ということに今回こだわらなかつたらできない。でも先程からのご意見のように、福祉を前面に出すとみんなが引いてしまうというのも現実だったら私も具体的な案はないのですが、その辺の仕掛けをどうするのかというのはちょっと一定の道筋みたいなものを出してやらないと、結局何かどうしていいのかわからないと高知県がなくなってしまいそうな感じがします。

○司会(田中委員)

玉里委員には休憩の後、まず開口一番をお願いして社協の立場から見てどうかということをお聞きしようかなと思っています。そこら辺を受けて、玉里委員、浜永委員には休憩後につないでいただきますよ。10分間ちょっと休憩を取らせていただきたいと思います。

(休憩)

○司会(田中委員)

そうしましたら再開したいと思います。先程休憩前の玉里委員のご発言にありましたように、人や立場によっても、先程地域福祉と言っても一般的に住民の方は地域活性化というイメージのとらえ方もあれば、役場サイドでは安全安心とか。社協ではある程度限定されたような福祉をイメージされる場合もあるようなお話がありました。特定の人に対する狭い意味での福祉とある程度普遍性のある広い意味での福祉との結びつけ方をどう考えていけばいいのかという

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

ような問題提起的なご発言をいただきました。地域福祉ということでこれまで中心にかかわってこられた、それぞれの立場からお話を聞かせていただけたらと思います。中平委員、浜永委員、平野委員から、ちょっと口火を切っていただけだと思います。

○平野委員

私は地域福祉の推進は先程からずっと話が出ているように住民の主体的になってかかわっていくことが一番大前提だと思います。その中で何がということを見ると、やはり高齢者も児童も障害者も1つになってまちづくりをしていくという視点が大事ではないかという気がしますので、瀬戸委員が低年齢から福祉教育を行うと書かれているように、子どもの目から見た部分という視点が大事ではないかという気がします。子どもというのは大人の小さなモデルみたいなものがあるので、言葉遣いとか考え方というのは両親のものを模倣している部分がすごく大きいと思いますので、やはりそういう部分の、家族ぐるみで福祉教育という。福祉の問題を福祉でとらえるのではなくて、やはりいろんな人がいるんだなということに合わせて、一緒に学んでいくという姿勢が大事ではないかという気がしています。地域にお年寄りがいればお年寄りに対する心遣いができるだろうし、お年寄りがいないとそういうお年寄りの考え方が分からないという部分もあるので、「マル」ですかね。富山方式のデイサービスセンターをしている所の話を聞いたときに、全部お年寄りから障害者、それから児童とか、みんなが入って1つの家で宅老所的なことをやっているということで、やはり1つの縮図ではないかなというような気がするんです。その中でみんなが学んでいって、極論になるかもしれませんが、その中での地域福祉を推進しているのかなと最近思います。

○司会(田中委員)

デイサービス「マル」のお話ですけれども、あそこはかなり富山方式ということで高齢者、障害者、児童、重度の人も誰でも受け入れる。そういう意味で「マル」という名前をつけられている。しかも要介護の人とか人だけではなくて、元気な人でも、親子連れとかそういう場合も含めて非常に普遍的に受け入れているということで、人数は少人数だったとしてもそこが一種のコミュニティになっているようでもありますし、先程の和田委員がおっしゃったようなある意味での拠点にもなっているような気がするわけです。ですから、高齢者、障害者だけではなくて、子どももやはり住民の主体ととらえて、その子どもがしっかりと成長していけるようないろいろな体験とか、いろいろな教育の場ということが必要だということになりませんか。それはやはり瀬戸委員あるいは松本委員に最近の事件なんかも踏まえたご発言ともオーバーラップしてくるような気がします。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○中平委員

先程から貴重なご意見をたくさん聞かせていただいて、上田委員がおっしゃられる福祉という言葉の持つイメージを普遍的なものとしてどう理解していただけるかという考え方と、それから松本委員がおっしゃるようにどちらかという福祉という言葉ではなく、もっと受け入れられやすいようなイメージで表していったらどうかというこというふうな僕のほうでは受け取りました。社会福祉の現場で働く者として、僕はどっちを追いつめていったらいいかというのは、ちょっと言い切れないなと雰囲気を感じていました。やはりこれまでもこの計画をつくる中の(イ)の地域福祉推進上の課題とかいう所でたくさん出ていますよね。老若男女、高齢とか障害ということにかかわらず高知県の特性も踏まえた課題、現代の社会状況とかそういうものがいっぱいきている中で、よく向こう三軒両隣の地域をもう一度取り戻しましょうというのが出る場合があります。果たして福祉とかいう言葉ではなくて、本当に家の出入りも自由で隣の家に行けばどこに寝ようとか、寝室の枕の位置まで分かっているというふうなお互いの付き合いに戻るというのが今の世代の幸せかどうかという僕は違うんじゃないかと思います。どういうあり方がいいのかというのは、例えば松本委員の発想でいうとこちらから枠を決めたものの考え方はやはり通用しない部分ではないかという気がしています。ただこの計画をみんなでつくりあげていく中で、いろいろな課題をここに書かれているような项目的なことで現実にもどんなものがあるのかという、地域の皆さんが集まった中で、「ああ、そうか。これなら自分らでできるね」とか。例えばこういう部分の玉里委員がおっしゃった福祉的なものでターゲットを絞って特定の人に対してというものは、ちょっとこれは自分らあて全部はできんねとか、では、どうでしょうか。この部分では行政の協力ももらって役割を分担してとかというふうな議論のできる場所をつくるのがこの計画をつくる上で重要ではないかなというふうに思っています。地域福祉推進の必要性という中身については、高知市と幡多とはまた中身がすごく違うと思いますし、細かいところはこうだというふうには逆に限定できないことが多いのかなというふうな気がしています。

○司会(田中委員)

最初から枠を決めずにやはりそれぞれの地域地域でいろいろとできるだけ課題や意見を出し合って、その中でお互いのできる部分、できない部分を話し合いながら決めていったり、一致できる部分は一致して行動をとっていくということになりませんか。あるいは福祉という言葉を使うのかどうかというのも先程来出ていますように、それだけでイメージがドンと先行してしまうとそれが得策かということもあります。前回、地域福祉計画という言葉自体が硬いというご意見もありましたので、例えばネーミングに関しましてはそれぞれの地域、地域に合ったものを考えることはできるかと思います。一応行政ベースでは地域福祉計画という位置づけをしておけば、ネーミングでもっとみんなが関心を持って集まってもらえるようなネーミングや呼びかけの仕方はそれぞれ工夫の余地はあるかと思いますね。どうでしょうか。浜永委員よろしくお願ひいたします。

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

○浜永委員

私はそしたら具体的に2つぐらい話をさせていただいてかまいませんか。この間、住民の方なんですけど、「自分の親の介護が必要になって初めて福祉を考えるようになった。自分の親の介護ということで福祉というものを考えたんだけど、その福祉を考えたときに、自分の近くにいる人、隣近所、地域にいる人のことも考えるようになった。それまでは一回も福祉なんて自分には関係がないと思っちゃった。会へも行ったこともないし、でも行って見て自分の親のことだけではなくて、自分の周りの人のことも考えるようになった」という話を聞きました。

一人暮らしの方もお金があって、いろいろなサービスを利用してきてとか、元気な体があってとかいう方でも(気持ち的に)満たされていないといいますが、寂しいとか、そういった気持ちで「私はお金はなにも要らんけれど、話し相手がほしい」という思いを持っている方もたくさんいます。でもそれが地域の人は「あの人は一人暮らしやけどお金がある」とかいうことで、別に何もその人に対するする必要はないじゃないですけど、「そういうネットワークとか見守りって必要かえ？」というような、そんなイメージを皆さんが持っているということあります。小地域ネットワークとか、十年以上かかわってきた中で、やはりそういった高齢者の問題も障害者のことも、それからいろいろな自分の周りの地域にある問題をやはり自分たちの問題、地域の問題として考えていく必要性があるので、私は地域福祉推進というものの必要性はあると思います。その公的なサービスとか、社協のような機関、それから当事者の団体、老人クラブであったり、身体障害者会という当事者の団体がありますけど、村であってもそういった団体とか機関だけではなかなかこの地域福祉を推進するというのは難しいと感じています。やはりその住民一人一人とか、近所の方とか、そういった地域の中で自分たちの問題として考えていかなければ、なかなか安心した生活をしていく、それから子どもを育てていくとかいうようなことはできていかないのではないだろうか。そのためには地域福祉推進は必要である。ネットワークでそういう課題をどんどん出し合ってきて個々のケースについてこうしたらいいとかいうのはありましたけど、計画としてこの地域にこういう計画を立てて、こういうふうにしていこうというのはみんなで考えていくというのが今までやってきていなかったことなので、計画というものも必要性はあると感じています。

それともう一つ、私は社協の立場ですから、やはり福祉でまちづくりというのは考えてみたいと思っています。福祉でまちづくりを考えて、福祉のネットワークというものをやってきた中で、でも福祉だけではなくて地域で、では災害が起こったときにどうしたらいいとか、防災についても考えたいし、ゴミの問題ということで環境の問題についても考えられる。そういった地域づくり、まちづくりというのものにもっていききたいと考えています。最初は福祉というもので始めた活動であったり事業であってもそれはやはり福祉だけではとどまらない部分へ広げていきたい。その発信はやはり社協として福祉で発信していきたいなと思っています。

それともう一つは高齢者とか障害者ということではなくて、子どもの問題でも最初に家庭ということが出てきていましたね。家庭も両親がいて、それから別にそんなに問題もないという家庭があって、でもそのお母さんに聞いてみると、近所に子どもがいないというのがあります。親が子どもを見ないとかいうことではなくて、子どもを近所の子どもと一緒に遊ばせたいけれど遊ぶ所がない。近所の歩いて行ける所に子どもがいないというような実態もあります。福祉の部分で遊びの広場を6月から民生児童委員が始めたのですが、それは本当に小さな一歩、1つの活動というか事業だったかも分かりませんが、お母さん方にとってみたら、何かそういう集まれる場ができてよかったので一緒にやらせてもらいたいということで、子育てのお母さん方も見えていますし、教育とかボランティアということで、学校の支援ボランティアの方々もそこで一緒に盛り上げてやっていきたいということもありますので、福祉が発端でいろいろな事業を始めたり、地域づくりをするということはあると思いますが、それがいろいろな所を巻き込んで福祉だけでとどまらないというふうにはしていかないといけないのではないかなと思っています。具体的な事例でお話しさせてもらいました。

○司会(田中委員)

それは現実に足を着けたご発言だと思います。やはりある程度限定された意味での福祉のようなものから出発したとしても、自分の問題として考えるということが必要だ。やはり何にしても一人一人が自分がどういう生き方をするのか、どういう必要性があるのかということがないと、実際の原動力にはならないのかもしれないですね。しかもそれがいろいろな意味で広がりを持っていく可能性があるのではないかな。こういうことですね。それは環境とか教育などと結びついていって、まさに福祉でまちづくりといった方向があるのではないかな。こういう指摘ですね。それぞれが自分のこととして考えていけば、ある程度限定されたものから始まっても、非常に広がりを持ったまさに地域全体を視野に入れたまちづくりにつながっていくのではないかなという非常に研究をさせていただくご発言ばかりですけども。

○浜永委員

福祉でまちづくりというのは、最初の発端が福祉でまちづくりということで、最終的に福祉という言葉はのいていくではないですけど、もう地域をつくらうということですね。

○司会(田中委員)

それはきっかけにはなるけれども、もうもっと。

○浜永委員

そうです。社協の立場で考えたらやはり福祉という視点を持っていろいろなことをやっているの、ほかの分野からいうと例えば教育でまちづくり、環境でまちづくり。いろいろなことを考えていると思うのですが、それぞれの考えているまちづくりというものが一緒になって、1つの地域づくりというか、まちづくりというものになっていくというイメージです。

○司会(田中委員)

先程の玉里委員のご発言に引きつけていけば、それぞれによって、何々でまちづくりという違うけれども、そういった人がいろいろと集まっていく中で総合的なものになると。

○浜永委員

もともとはやはり自分の分野の中でないとなかなかほかの分野で、いきなり大きな分野でというのは難しく、自分の分野でのまちづくりをそれぞれが考えていると思うんですけど、やはりそれをその分野だけでとどまらずに一緒になってやるとか、つなげていけるというところをどこが持っていくかということなんですけど。福祉だけで取りきるということは考えていないです。

○司会(田中委員)

そういう意味でいうと、それは先程来出ている広い意味の福祉にもつながっていくのではないかな。ある程度、オーソドックスなとらえ方でとらえる人もいれば、実際にそういうかわりで仕事をされている人もいますけど、また別の次元で広い意味でのいろいろなとらえ方がある。そういう人を最初からセレクトしたりせずに、いろんなイメージを持ったまま来てもらって、そういった人たちで、では全体でどういうふうにしていこうかということになっていけば、非常に総合的なものになっていくのではないかなということでしょうか。今の理解で間違いなければ非常に勉強になりました。ほかに、どうでしょうか。

○玉里委員

また戻すような話になるんですけど、では地域をどうするかというのが最後に残ると思うんです。ずっと議論してきた、やはり都市部と中山間地域はやり方も違う。都市部は地域に縛るよりネットワーク型だろうということが初めころの議論がありましたし私もそう思うんですけども、やはり多くの方がかわるというときに、かなり広い地域を指定してもなかなかかわれないわけですよ。一方、中山間地域は集落を基本にしなごら、2、3の集落を昔からつながりのあるエリアと考へたりとか、あるいは町村の合併のときの旧村単位とかいろいろな単位がある。公民館活動なんかをしていてここが自分たちのエリアだというものがある程度分かっていますので、例えば行政なり、社協なりがグループ化して考へるときに非常に考へやすいものがあると思うけれども、では高知市なんかの場合、昔の集落というのは今は見えないわけですよ。いろいろな人が入ってきたり新興住宅があつたり。これはガイドラインをつくる研究会だから、住民みんなで考へましようと言って、一番困るのは実は都市部ではないかなと(思います)。やりたい人はいっぱいいるし、いろいろな活動をしている、松本委員なんかもそうだと思うし、むしろ地域に縛られずにやりたい仲間やりたいんだという発言もあつた中で戻すけれども、ではみんながかかわる地域づくりをするときに、どのエリアを指定していきまうかというのは、実は都市部のほうがすごく難しい。要は小学校単位とか、そういうのをここで1つ一定の方向を出したほうがやりやすいのか、それともそういうのはないほうがいいのか。みんなと言っても、結局かかわれなくなつてしまふのかなというのが心配な部分です。

○司会(田中委員)

高知市などのような大きな地域のほうがいざやるとなるとやりにくいという点で、最初に壁にぶつかりやすいのはむしろそちらではないかという、これは確かに重要なご意見かもしれません。あるいは前に瀬戸委員がおっしゃっていたことがちょっと思い浮かんできましたが「お互いにあいさつするような関係もないというようなことがある中で、まず顔見知りになることからスタートしないと地域福祉計画といつてもその前段階が必要ではないか」というご意見もありましたけれど、松本委員どうでしょうか。

○松本委員

最初はやはりネットワーク型で自分たちのやりやすい方法でやつたほうがいいのかなど思っていたんですが、でもよくよく考へたらネットワークで組んでいるみんなは根無し草なんです。例えば日曜日など会合があつて、出ていくじゃないですか。そうしたら出ていくときにドブ掃除をやっているんですよ。そうしたらそれをやらなくていいのかどうかというところと迷うところがあるじゃないですか。地域のそこで寝泊まりはしています。やはりほとんどの時間をそこで過ごしているのだから、そうなるのはやはり地域というのは住んでいる所をさすのかなと僕も思うんですよ。

ただすごく破滅的な意見なのかもしれませんが、やりやすいところがモデルになってどんどんやつていっていいのではないかなというふうに思ふんです。中山間地域がやりやすいのであればやりやすい所がモデルになっていくと、多分高知市の人、都市部の人とはむなしさを覚えてくるのではないかな。なんであの人たちは生き生きしているんだらうって。そこまでいって、自分たちの生活を個人が見直していくまで都市部の人間を追い詰めないとちょっと無理かなという気がするんです。今の段階でどこかまでを区切つて、「ではここでやつてください」と言つても、急にはその感覚になれないような気がするんです。やはり周りで、例えば土佐町、大豊町、三原村、宿毛市、みんなこうやつて生き生きしていますよというのを見ると、やはり人間は負けたくないとか、遅れをとりたくないというのもあつたりして、何かやらなきゃねというふうに突き動かされるまでうるさくないやり方をするのであれば待つのがいいのかなというふうに思っています。

でもどうしてもやらなくては行けないのであれば、やはりやる人間が先導を切つて、うるさい思いをして1つのものにつくりあげるということ、やろうと思つたらできると思ふんですけど、自然にいつたほうがこういうことは長続きしますよ

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

ね。やはり自分たちがやりたい、ああなりたいと思って初めて長続きするものだと思うので、そのくらいでないとなんと高知市はできない。自分の住んでいる現段階を見てもそう思います。うちの前のゴミのステーションは出し方が全然バラバラなんです。本当に文句を言ってやろうかと思って、町内会長に「どこの人が突き止めてくれ。僕が文句を言いに行くから」と言ったら、「やめてくれ。問題になるからちゃんと市の、行政のほうに言ってせんといかんから」と言われたんです。でもそれって自己防衛ですよ、自分の住んでいる所の環境を守るという。それができない状況にあるというのは、そういう状況からではみんなが地域のことを考えましょうということと言ってもできないような気がしています。

○平野委員

私は高知市の鏡川の清掃はすごいなと思います。7月の今度。

○松本委員

13日ですかね。

○平野委員

うちの地域なんかはお年寄りが多いのですが、その時期になったら回覧板が回ってきてほとんどのみんなが出るんですよ。そうしたら時間より前に全部役割が決まっています、私たちが行ったらすでに終わっている状態ぐらいになって、きれいにしているんです。それは毎年何か役割が決まっている。みんながそれにかかわってやる。すごくその地域はきれいなんです。ああ、こういうことも私たちが習わなくてはいけない部分があるのかなと思います。前段から準備をしてこうやってということ。みんなが生き生きとして、その辺りの地域の人たちはみんなそれを目標に、何かお祭り気分ですごく頑張っているというのがあって、そういうのはすごいなと思って。私たちは鏡川の近くだからそういうのがあるみたいで、近くでない所はあまりそういう動きがないということを聞きます。近くに川があるからそれに向かってきれいにしようという意識がすごくあるみたいで、それが地域参加になるのかなと思いました。

○司会(田中委員)

高知市内でも地域によっては、かなり住民が主体的に盛り上がりながらそういった地域の生活課題に対応しているところもあるということでしょうか。

○平野委員

そうですね。鏡川清掃という(ように)、何か目標があれば、お祭りの行事があれば。

○松本委員

鏡川清掃と言うよりも鏡川ではないでしょうか。だから多分五台山の人は五台山だろうし何かそういうものがあるんですね。龍馬の生誕地はやはり上町の人たちが守っているし愛着すべきものが何かあるんですね。昔は生まれた土地やしというので愛着があったんでしょうけど、僕も実際引っ越しをずっとして家を持っていない人間ですから、今住んでいる所にどれだけ愛着があるかと言われてたら、やはりイマイチですもんね。生まれて小学校くらいまで育った所の愛着度と、今たまたま仕事がこういうかたちだからといって住んでいる所との愛着度みたいなのは全然違いますもんね。そういうやはり守りたいという衝動が地域のことを考えたりとか、隣の人を考えたりということになっていくのではないかなと思うので、そういう意味で都市部がやらなくてはいけないものというのは、この計画をつくる前の段階に戻ってやらなければいけないような気がします。だから先程の僕の発言にもなったのかなという気がします。都市部でもできる所はあると思います。古くからまだ町が残っているような秦地域だとか長浜、三里、朝倉なんかもそうだと思うのですが、高知市でも結構団結している所もあるので、そういう所がモデルになってやれることは可能ではないかなと思います。愛着だと思っています。

○司会(田中委員)

愛着がね。先程のお話だと、中山間地の中でもモデルになる所が出てそれが町のほうに影響を与えていく場合もあれば、高知市のような所でも地域によってはモデルになるような所が出てくる可能性があるということでしょうか。あるいは松本委員のように、「なんだ、このゴミ出しの仕方は」ということで、燃え上がる人が起爆剤になるのでしょうか。それが1つのモデルになってというか、ゴミ出しの非常に熱心な地域ということも出てくるかもしれませんね。

○松本委員

話としてはないこともないでしょうね。

○司会(田中委員)

それから鏡川の所は祭りというイベントでしょうか。祭りのイベントとは関係なく。

○平野委員

いえ、鏡川の清掃。

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

○司会(田中委員)

清掃で、祭りとは関係なくて。

○平野委員

1つの行事というところで、祭りにみんなが毎年その時期にあるから楽しんでいるというか、役割分担決めて。

○司会(田中委員)

私なんかは別の意味のイメージでとらえたことがありますけどね。草刈りとか、なんとかおっしゃったようにだいたい何時から始めますというと、30分も1時間も前から始める人がいるんです。何かあれはとにかく遅れをとったら後からどういう目で見られるか分からないからというそういう場合もあるのかなとずっと思っていたんです。みんな強迫観念にとらわれながらやっているんじゃないかと思ったりもしたのですが、必ずしもそうではないということですかね。

○平野委員

うちの地域は事前に皆さんが打ち合わせをしてやっているみたいです。

○瀬戸委員

それはやはりお年寄りの方が率先されて。

○平野委員

そうです。役割を決めて。結局私たち若い者になると若い者は朝は寝坊するからというので、何かわりと外に置いて、先に(年寄りが)計画をして、かまわなかったらこの時間に出てきてくれという感じで計画を立ててくれています。必ずしも強制というわけではないんですよ。出てこれないかもしれないからというような感じで。自分たちはやるんだという意気込みでやっている。

○瀬戸委員

自分たちはやるという方々は何かその地域の役員ですか。自分たちが全然役員じゃなくて。

○平野委員

役員じゃなくてその地域の人間というか、近所の。やはり言われるように鏡川があるから鏡川をきれいにするというようなことで。

○司会(田中委員)

やはりそういう自分の地域のシンボルのようなものを大事にしたい、守りたいと先程松本委員がおっしゃったようなそういう共同意識みたいなものに支えられて、そういった活動を……。

○平野委員

そうです。やはりきれいになれば、その地域が美観地域になってしまうので、だから絶えずきれいになっているんですよね。そこの所は。やはりそうなると空き缶も放らない。極力みんな、子どもたちも気をつけるみたいな。ちょっと小さなそういうコミュニティーができてみたい感じがしょうね。

○司会(田中委員)

ある種の地域に対する愛着心というものがちゃんと息づいている。こういうことですね。地域差はあるけれどもそういった部分もあるということでしょうか。

○平野委員

高齢者が多い地域ですから。

○司会(田中委員)

これは間違っているかもしれませんが、例えば瀬戸委員があいさつをしないような関係が他方ではあるということですが、あまりにもお互いにあいさつがない、人と人の触れ合いがないということで、例えば高齢者は高齢者で、児童は児童でと別々やっているけれど、一緒に楽しめるスポーツを地域の中で企画して、それをきっかけにして、高齢者同士、子ども同士、子どものお母さん同士が知り合いになって、「ああ、あのとき一緒にこういうイベントをやりましたね」ということがきっかけになって、今度はまたそれが話題になってお互いが話をする、あいさつできるような関係をつくっていくようなものをちょっとイベント的に企画してはどうかということで、今ちょっと学生が考えています。場合によってはそういったイベント的なものも1つの関係をつくっていくきっかけになるかもしれないと思ったりもしたんですけどね。

○平野委員

何かの機会で盛り上がってそこで人間関係ができたところというのは大事ですね。

○司会(田中委員)

もちろんそういったこの地域を大事にしたいということがずっと根付いている場合は、それはそれでいいですが、逆にある程度の仕掛けがきっかけになることもひょっとしたらあるのかなという気がしました。甘いかもしれませんが。

○松本委員

絶対にあると思います。ちょっとしたことですけどやはり愛着をわかせるための何かものというのは絶対にあると思います。運動会をやったりして、やはりこの地区のおじちゃん、おばちゃん面白いと思わせることも愛着の1つだと思います。僕が今住んでいる所に「ああ、この町って結構面白いじゃないか」と思い始めたのはほんのこの間です。潮江の成り立ちみたいな本があったんですよ。ずっと原始の昔は海だったと書いてある本を見て、ああ、この町はこうだったんだという歴史が分かって初めてこの町は面白いと思いはじめたんです。そういう何かちょっとしたことで愛着はわくような気がするの、そういう投げかけはやはりどこかがやっていかないといけないでしょうね。そういうこともやはりみんなが幸せになっていくという観点からいうと、この計画の中のどこか端っこには入っていないといけないような気がするんです。頭から何か福祉というイメージのところだけをとらえた推進のための計画づくりをしてしまうと、せっかくのこの機会がもつたないような気がするの、結構大きな問題にはなるかもしれないですけどせっかく大きい県単位ではなくて地域というのが付いているので、この機会に何かもってみんなで絡めるようなものをつくる起爆剤にしたい気がします。それがどこかに入っているべきだと思います。

○司会(田中委員)

そういう意味では話し合いをしているわれわれ自身も委員という立場を離れたら結局住民として今後どう行動していくのかがまさに問われるわけですね。非常に重要なご意見をいただきましたけれども、ほかにございますでしょうか。

○玉里委員

夢のあるような夢のないような話になるかと思いますが、結構日本では今までいろんなまちづくりをやっているわけですね。また大豊町の話ですが、今回地域づくりを進めるのに当たって、住民の意見で非常に面白かったのは、「もう今までいろいろやってきた。福祉のほうでは声かけ運動もやってきた。婦人会もやってきた。老人会もやってきた。(いろいろやってきたが)まだ足りませんか」という意見が出るのです。それは非常に素直で、ではどうしていいのかというのが分からないからそういう意見にもなると思いますし、自分はいろいろな清掃活動もしてきた。先程和田委員も言われたようにやはり田舎というのはやることがいっぱい地域でありますから、森林の管理とか、草刈りとか、そういうものはみんな今までやってきているし、それでもまだ足りませんかという意見はやはりそれに答えるものがまだこちらにないからつらいですね。またそこから生まれてくるのだとは思いますが、そんな現状があります。もう一方、高知市も、私は高知市に住みながら、分からないですが、住民がプランしていますよね。ブロックに分けて。すでに地域づくりか、まちづくりの……。

○――委員

コミュニティー計画。

○玉里委員

コミュニティー計画は非常に大きな計画で、多分しているのだと思いますが、私が住んでいる鴨田がしているのかもしれないんですけど、そういった地域づくりをもうすでにしてきているものとこれの関連性があるのか、ないのかみたいなものですね。何かそういうものも何か動いてきたものも生かしていければいいのかもしれませんが、何か新しいものをまたやらなくてはいけないというようなところでプレッシャーは非常に大きいみたいです。高知市も先程、例えば小学校エリアというの1つのエリアかもしれませんが、コミュニティープラン、計画というのもやってきて、そのエリアを活用するというの1つの考え方だけでも、いやそうではないというの1つの考えですね。何かその辺からもやっていくんだけど、課題がまたやらなくてはいけない。またやらないかん。もうすでに何か動いているものがあって、それに乗っかっていければ今までの取り組みも生かせるのではないかなと思っています。

○司会(田中委員)

すでに進められているコミュニティー計画と地域福祉計画というのがオーバーラップというか、あるいはその上に積み重なっていくという、側面があるのですか。

○堀川委員

高知市として地域福祉計画はどうするかということはまだ全然決めていないわけでは無いですが、ここでの話などもそうなんです、1つはやはり地域福祉計画というのは地域がつくる、地域が主体となってやるものということがあると思います。それで高知市の場合はある意味で県計画のように各地域が計画をつくっていく支援の計画みたいなものをつくった上で、その地域地域の中で、例えば今言われたようなコミュニティー計画の見直しの中にそういうものが入ってくるという地域があってもいいでしょうし、地区社協の活動が活発な所では、地区社協が主体となってやってくださってもいいだろうし、また別なカタチで新たに、どちらの活動もないような所もありますのでやったらいいかなというふうに

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

は思っています。

ただちょっと去年からいくつか仕掛けをしてみてください、コミュニティー計画のない所を選んでちょっと仕掛けたらコミュニティー計画をその地区でもやらなくてはいけないという話になってバッティングしてしまって、同じ行政の中でわれわれ健康福祉部のほうはこういうものをもってくと。市民生活部のほうはコミュニティー計画をやると、これはどうということだというふうにしられた経験もありますので、なかなかやはりそこら辺はちょっと難しいところはあると思います。でも福祉ですからいろいろなやり方が……。

○司会(田中委員)

それもやはりそれぞれの地区の自発性といいますか主体性ということでいろいろなやり方はあり得るということですね。高知市はバリエーションが。

○堀川委員

そうですね。バリエーション、それを支援していけるような高知市の計画にして、地区でそれぞれのやり方があっていいのかなと思います。

○司会(田中委員)

先程の玉里委員のご発言で「これまでやってきたものでまだ足りませんか」という非常に聞きようによっては重いご意見があったということですが、それはこれまでやってきてもうこれだけ十分やったと。だからもう必要ないんじゃないかという客観的に見て地域の生活課題というのは、これまで十分対応してきたという意味での発言なのか、それとも自分自身はもうこれだけのことをやってきた。もう一人当たりの負担がいろいろな役割があると。客観的に見てはどうかは知らないけれど、これまでこれだけやってきたのにまだ何かやらなくてはいけないのかという個人的な負担の限界という意味から出たご発言なのか、どちらかなと思ったのですが。

○玉里委員

実は1件だけではなくて結構そういうふうに言われる方が多いことに私も驚いたのですが、やはり負担ですね。今までにいろいろな行政のほうからも委員が下りてきたとか、あるいはそういった取り組みに対して、新たな役割みたいなものができてまた自分たちがやらないと。何をするという目標が分かっていないのだけれどまた出てきたのかというのは確かにあったと思います。だけど今回はそうではなくて、もっと自分たちの地域を自分たちでつくる。別に地域福祉計画をつくる動きがまだないわけですから、ただ住民の発言の場から学ぶものとして下ろし方というか、今後必要ですよというふうに行行政が持っていくときにもういっぱいいっぱいだと。もう今までいろいろやってきたんだという、そこで終わってしまったら非常にもったいないというふうにするわけです。やはりこれからこの自分たちでいろいろ考えて、それこそ田中委員が言われた公助、共助と自助をどういうふうに考えていくかということ自分たちが入って、せっかく考えていけるチャンスがあるというふうにしてもらえたらいいんだけど、こんなにもやってきているのにというような感じになるおそれがあります。

○司会(田中委員)

なるほどね。かなり1人の人に負担が重なっているという、先程の新宮委員の文書で出していたご意見の中に、一人一役というのがありますが、もうすでに一人何役もやっているということで、それらしい発言は和田委員も前にされていたのではないかと思います。逆に中山間の場合ですとあるいは高齢化が進んでくると、1人がもう何役も受け持ってきているという問題も他方ではあるということになりましょうか。

○玉里委員

私も高知市の事情が分からなくてしゃべりますが、高知市はすでにコミュニティー計画ができてビジョン、報告書もあります。そういうのがさあ動きましようかとか、あるいはやる気になっているところで、次はこれですよというふうにしていったときに、自分たちの地域をどうするかと消化されていないところにまた持っていかれて、でも出てくる委員はまた同じところから始まっていくところで混乱みたいなものがあるので、何かその辺を整理していくとか地域福祉計画……。どうでしょうね。私の考え方では今まで取り組んでいたものの力みたいなものを活用できたらというイメージを持っているのですが、それはちょっと違うかもしれませんし、やってみないと分からないところがあるのですが、今まで動いてきたものを活用しながらそこにまた新たな力を入れていくというイメージを持っているんですけど。

○司会(田中委員)

ありがとうございました。

○松本委員

あの、ものすごく素人考えなのかもしれませんが、ずっとこの話し合いしていて、ここは別にこっちと一緒にやれやせんかやということが結構あったと思うんです。詳しくは私もちょっと私もあれですけど、例えば保健のこととか、福祉のことを分けなければいけないとか。別に一緒にやろうと思ったらやれるのではないかということとか、それからお仕事それぞれの所ではそうはいかんよということはあるけど、多分僕らみたいな素人はこの地域福祉計画をつくろうやと集ま

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

ったら、多分そういうことも議論され出すような気がするんですよ。すごく期待的な希望的ですけど、初めて地域住民が主になってこういうガイドライン的なものを参考にしながら計画をつくっていかうということが行われるので、ひょっとしたら、「あれ、これは前の計画とダブって別にこれは必要ないんじゃないか」ということも出てくるかもしれないですよ。だからそういう意味では今までと違った、「また、これをやらないかんろうか」というのよりも、とりあえずやってみるということが、すごく希望的観測ですが、新しい意味で、それなら前の計画必要ないねというようなことが出てきそうな気がするんです。

〇――委員

それはありますね。

〇松本委員

つくった側としてもずっとモニターはしていかなといかんでしょけど。

〇司会(田中委員)

今日ご欠席ですが、板橋委員が比較的こだわられていた点で、やはりこれまでの到達点がどうだったのかということ、とにかく「何かやらねば」ばかりが空回りしても、それは実際の動き、地に足を着けた動きになりませんので、やはりこれまではどうだったのかというのを素直に見た上で、では今後どうしていくのかという、これまでと今後というののすりあわせはやはり必要でしょうね。あるいは既存の計画との関係ということもあるでしょうね。今日は最後ということで、皆さんも残っているエネルギーをかなり最後ためられてきたのかどうか、私自身は非常に面白かったなと思っておりますが、どうしても言い足りなかったという点がございましたら少しだけでもどうでしょうか。

〇上田委員

十分言い尽くしました。

〇浜永委員

言いたいことではなくて聞いてみたいことですが、中山間とかの話は割とずっと出てきていたのですが、この委員は高知市の方が非常に多いと思うんですよ。だから、葉山とか土佐町とか日高とかはその辺の事例というのはかなり出してきていたのですが、高知市で実際この計画を策定するとしたときのイメージというか、ではどんなふうにしていくのかなというのを、もし、なんとなく最後のほうになってきたのでイメージとしてあれば聞きたいと思うんですけど。住民参加を全住民を集めてというのは無理だと思いますが、住民参加をどのようにやるのかなとか聞いてみたいと思います、具体的に。

〇――委員

僕も聞きたい(笑)。

〇浜永委員

多分これで聞くとあとはもう。

〇――委員

一致しないとね。

〇浜永委員

どういうふうに、それぞれ皆さん、住民の一員でもあるし、立場もあるし。

〇司会(田中委員)

私は個人的には、予測としては高知市が最初に頭をポンと出されるかなと思っていました。一番最初に出していただいた参考資料の研究会の報告書もありましたので、地域福祉計画についても高知市が動き出して、あとはそれを見ながらほかの所がどうするかというかたちになるのかと思っていましたが、先程の堀川委員のお話ではまだ実際にはあまり動いてはいないということですね。どうなるかというのもまだです。

〇堀川委員

それはもっと僕よりも上の段階で決定をしていただかなければいけないことになると思うのです。一気にやるのか、モデルでやるのか、はたまた手挙げでやるのかというのは、僕自身はそれは手挙げでやろうというところからやっていくべきだと思っていますが、そういうことはやはりなかなか公平・平等ということをもっとちゃんとやれという意見も上のほうにあると思いますし、そこら辺は分かりませんが、非常にどこでも同じだと思いますけれども、今僕のところで障害者計画とエンゼルのほうと、高齢者がこの前に終わりましたが、障害者計画などでは2、3カ所に集まってもらって、市町村ごとにシンポジウムをやって、それから2週間後にその中で興味のある人に声かけて数十人、百人規模でワークショップをやるというのを積み重ねてやってきていますが、その後の行動主体としての組織が残らなければい

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

けませんので、地域福祉計画の場合は、単に市民の勢いでつくってもやる人は組織残りませんから、その辺はどういう仕掛けでやっていくか。やっぱり高知市33万人、小学校区39校区で考えることがいいのではないかと。

○司会(田中委員)

やっぱり一番自主的にそれが動き出せばいいのかもしれませんが、そういったことについてそういう地域福祉計画があるという説明は一応ちゃんとした上で、あと先程平野委員、松本委員がおっしゃったように自分たちの地域をどうしようという意識の高い所から何かまさにモデル的な動きが始まればいいですし、あるいは場合によっては地区社協で積極的な所とか、あるいはコーディネーターをモデル的に配置されている所がサポート役に回りながら何かモデル的な動きが始まればいいかと思いますが、そこら辺はちょっと今後のまだ難しいところですね。

○浜永委員

広い所はなかなかしにくいですね。

○司会(田中委員)

まさにそれでも重要な、先程来出ているように、そういう町(街)のほうと中山間という意味で分け方をすれば注目されることになるでしょうね。いずれにせよ、今日いろいろとご意見や聞きたいことを出していただいて、まだ少し消化不良の所も残りましたけれども……。ちょっとこれは初めいろいろと出していただいたご意見のポイント部分をまとめようかとも思いましたがこれはかなりになりましたので、あえてまとめるようなことはしませんが、やはりかなり集約的な意見としてあったのは、そこに住んでいる人みんなの問題として一人一人がやはり自分の問題としてとらえていくということですね。特定の人のもものだけではないということで、高齢者、障害者、あるいは児童にとっての福祉ということも考えないといけないですけれども、そうでなくても非常に若い人や現役でバリバリと働いている人にとっての福祉ということもやはりあるわけですね。それが場合によっては地域の活性化とか若い人にとっての魅力のあるまちづくりとかということになることが当然あると思います。やはりどの人にとっても自分らしい生き方をしていく、あるいは自分の能力や興味、関心を発揮できるようなそういうことをしていける雰囲気がある、そのための基礎条件があるような町ということで、それは求めているものは必ずしも介護的なものだけではなくて、いろいろ地域のまさに活性化とか、そういうことにかかわる部分もあるのですが、それをすべて、先程おっしゃったように、いろいろな、何々でまちづくりというようなことを抱えた人が特定の人に限らず集まってもらって、その中で総合的な地域福祉計画というものに、狭い意味の福祉でとらえている人だけではなくて、教育やその他、文化とか地域おこしとか、いろいろあると思いますけれども、そういったことがやはり人が持ち寄って総合的に話し合いを進めながらできるところは一致して行動していくということになっていくのではないかと思います。そういう意味ではやはり一人一人が自己実現をしていくというのですが、一人一人がこういう人間でありたい、こういう生き方をしたい、あるいは先程の新宮委員の話だとそういう意味で暮らしやすいということ、これは一人一人が暮らしやすさの意味は違うにしても、一人一人が自分の思う暮らしやすさができるまちづくりが福祉ではないかと。ただその場合、ある程度自分たちだけで、あるいは個人でできる場合もあれば、特に周りの協力が必要な、自分が自己実現する場合でもやっぱりそれは一人で全部できないという、そういう人たちが確実にいることは間違いのないわけで、そこはやっぱりそうでない人に比べてより多くのサポートは必要になってくると思います。だけどそういった人だけに限らない。あるいはそういった人でも自らやっぱり地域に発信できるような。その人自身が生き生きと輝いているようなまちづくりが今後必要なのではないかと思えます。

本当にこの長きにわたって、皆さん、活発なご議論をいただきましたが項目に沿った議論としましては今日で終わります。次回がまさに最終会議です。今度できれば事前に、ちょっと微妙な言い方ですけど、間に合う限りは前日くらいまでに間に合えばまとめを郵送できるようなことも考えたいと思っています。先程事務局の方ともお話をしていたのですが、これまでの議事録膨大になっていますが、これをこのガイドラインという形式にまとめるわけですね。分担したほうがいいのかということになりましようかね。

○一委員

それはやっていただいたほうが。(笑)

○司会(田中委員)

とりえず雑にはなるかもしれませんが、できる限り皆さんのこういったものを最大限反映するようなかたちでの文案をお作りした上で、事前に郵送できればお送りして見ていただいて、少なくとも当日にはこういったところでこういう具合にまとめますので、ああ、これは抜けているではないかとかということがありましたら、追加、あるいはこれはおかしいとか、削れということがありましたらできる限り出していただくということでよろしいですか。それで皆さんよろしいでしょうかね。そうしたらそういうことで、今回は最終ということで皆さん本当にお疲れさまでした。

○事務局

前回、参加の委員さん方から事前調査した限りでは24日の1時半から4時という予定でその後、6時ごろでしょうか。

○司会(田中委員)

第10回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録

ご都合の悪い方はいらっしゃいますか。これはできれば全員出席していただくことを前提にしたほうがいいのではないかとこのように話し合ったりもしていますが、せっかくいろいろ皆さんかかわっていただいたということで、全員がということで24日でよろしいですか。

○事務局

それでは2時半から5時ということで。

○司会(田中委員)

それで(打ち上げを)始めるのが6時から。そうしたらだいたいそこら辺でいいですか。今日はお疲れさまでした。最後の1回よろしくお願いします。